

『ハトとカラスと雀と鴨と』

私は以前、何者だったのか？今の人間の姿になる前は、どんな姿をしていたのか？

この問いかけが、今日も私の中で息をしています。

失われた記憶を求めて、私は今日も旅に出ます。

土曜日の午後二時半。私はみどり町公園にいます。穏やかな空気に、やわらかな風。優しい初夏の暖気が身を包みます。

ホー、グルルルー。クー。ボー。パタパタ。ククククー。

おそらくハトのものなのでしょう。注意して聞くと、いろいろなバリエーションの声で鳴いているのに気付きます。

手をつなぎヨチヨチと歩く老夫婦。ハトにえさをあげるおじいちゃんと孫と思しき男子。レジャースーツを広げ、お弁当を食べる女性二人。長いリードにつないで犬の散歩をする女性。ベンチにてこの空間を全身で味わう中年の男性。向かいに見える瀟洒な洋館の前庭でお茶を楽しむ老夫婦。いろんな登場人物がこの風景を作っています。

バサバサー、アーアー。

おじいちゃんが勢いよくまいたえさに、ハトに混じってカラスが群がります。きらきらと光る太いくちばしを先頭にして、ミサイルのように滑空するその姿に脅威を覚えます。

ハトの方が若干多いでしょうか。しかしほぼ同数のハトとカラスの群れが一カ所に殺到します。一見するとハトを押しつけているような、また、違う面から見るとハトと共に生きる兄弟のような、どちらにもとれそうな光景が目の前に広がっています。

葉の緑、たんぼぼの黄、水面の深緑、さくらのピンク、木の幹の茶、いろいろな色が目を楽しませてくれます。

ふと、考えるのを止め、こうやって要素に分解せず、全体として今この風景を楽しみたい気になりました。

ピチピチピチ。

雀達がやって来ました。彼らはおじいちゃん主催の饗宴には参加せず、ハトとカラスを遠目に置いて、自分たち独自のえさ場を探しているようです。それにしても、雀ってこんなに大きかったのでしょうか。

こうしてぼんやりとベンチに座っているだけで思考はいろいろと進んでいきます。

目にする自然、耳にする生命の音、肌に触れる温熱のような暖気、手に足に触れる木組みのベンチの感触、鼻孔をくすぐる草いきれの香り。

考えるつもりはなくても、私の感覚を刺激する全ての環境が、思考の流れを生み続けるようです。

目の前の池に一羽の鴨が着水し、その時の衝撃で水面に波紋が生まれました。すぐにウイ字の航跡を生みながら、左へと移動して行きます。

バシヤ！

あ、今、顔を洗ったのでしょうか。一瞬前のめりにもぐったように見えたのですが、すぐにまた元の姿勢に戻りました。

バシヤバシヤバシヤ！

今度は長い。魚を食べているのでしょうか。捕食の姿に言い知れぬ不安を覚えます。

風が出てきました。

クックー。ハトが鳴いています。

中学生と思しき五人の男の子たちが、網と虫カゴを手にとって来ました。池にいる小魚でも採りに来たようです。うち一人は「鴨を採る！」とはしゃいでいます。

「カメがいるぞ！カメ、カメ！」

カメがいるそうです。うち一人がそう叫びました。どこだどこだと辺りを見渡してみます。探してみるが、見つかりません。

「あそこだ！あそこ！」男の子たちの声が大きくなりました。どうやら見つけたらしいです。私はまだ見つけられません。

ざくざくと土を蹴り、私の方に向かってやってきます。それにしても、中学生ってこんなに大きかったのでしょうか。

そう思った瞬間、先ほどからちらついていた予感、きつと違うと押し隠してきた不安が一気に膨らみ始めます。

え？もしかして、自分が？

ひよい、とつまみあげられる自分の姿が脳内に結ばれます。

まさか・・・

クックー。

またハトが鳴いています。

(二〇一〇年七月三日)